

報道関係者 各位

2023. 2. 15  
<配信枚数2枚>

## 【立命館土曜講座のご案内】

3月テーマ「人生100年時代のお金の話」・「近代日本知識人の『母』」

開催日時：2023年3月4日(土)・25日(土) 10:00～11:30

開催方法：オンライン(Zoom ウェビナー)

3月の立命館土曜講座は、法政基盤研究センターの企画として「人生100年時代のお金の話」、加藤周一現代思想研究センターの企画として「近代日本知識人の『母』」をテーマに、オンライン(Zoom ウェビナー)で開講いたします。

どなたでも無料で受講いただけますので、ご関心のある方のご参加をお待ちしております。

記

### ■立命館土曜講座 3月テーマ「人生100年時代のお金の話」

(1)第3377回「相続と信託」

日時：2023年3月4日(土) 10:00～11:30

講師：大阪経済大学 客員教授 岸本 雄次郎

### ■立命館土曜講座 3月テーマ「近代日本知識人の『母』」

(2)第3378回「丸山眞男とその母、加藤周一とその母」

日時：2023年3月25日(土) 10:00～11:30

講師：立命館大学加藤周一現代思想研究センター 研究員 半田 侑子  
関西国際大学 講師 劉争

開催方法：オンライン(Zoom ウェビナー)

内 容：別紙参照

聴 講 料：無料

定 員：400人 ※実施前日12時までに要事前申込。定員に達し次第、受付を終了。

申込方法：立命館土曜講座のWEBサイトよりお申し込みください。

<https://www.ritsumeai.ac.jp/doyo/>

主 催：立命館大学衣笠総合研究機構

そ の 他：文字通訳を配信しています。

以上

本リリースの配布先：京都大学記者クラブ、草津市政記者クラブ、大阪科学・大学記者クラブ

### ●内容についてのお問い合わせ先

立命館大学衣笠総合研究機構 担当：武田・堀

TEL.075-465-8224

<https://www.ritsumeai.ac.jp/doyo/>

## 別紙

### ■立命館土曜講座 3月テーマ「人生100年時代のお金の話」

#### (1)第3377回「相続と信託」

日時：2023年3月4日(土) 10:00～11:30

講師：大阪経済大学 客員教授 岸本 雄次郎

講師による内容紹介：

不老不死が実現されたわけではありませんが、人生百年時代と言われ始めました。そこで、現役を退いた後もそこそこ長くなった人生における経済基盤が重要となってまいりました。加えて、可愛い孫子のための、保有資産の上手な残し方も優先順位の高い事項となっています。そうした中、最近では「信託」という法的手法が話題となっています。

アメリカの大富豪の中で保有資産を「信託」していない者は、ほぼ存しないとされている一方、わが国では今のところ「信託」はそれほど用いられておりません。その理由としては、遺産目録の検認に関する日米の法制面の相違が最も大きいのですが、死生観の相違が最大要因でありましょう。

そこで、最近とみに話題となっている「信託」に関して、人生百年時代における資産の管理方法および次世代への資産の継承方法についてお話します。後継ぎとなるべき子女が存しないと、逆に、一子相伝したいのにそれがままならない等、事業継承等の具体的問題を題材として、「信託」による解決法を皆さまとご一緒に考えてまいりたいと存じます。

### ■立命館土曜講座 3月テーマ「近代日本知識人の『母』」

#### (2)第3378回「丸山眞男とその母、加藤周一とその母」

日時：2023年3月25日(土) 10:00～11:30

講師：立命館大学加藤周一現代思想研究センター 研究員 半田 侑子

関西国際大学 講師 劉争

講師による内容紹介：

<半田侑子>

本講演は、筆者が研究代表をつとめ、サントリー文化財団「学問の未来を拓く」研究助成を受ける共同研究「近代日本知識人の「母」——丸山眞男・加藤周一・鶴見俊輔の母たち」を進める過程での中間報告として位置づけ、丸山の母、セイに絞って論じます。

近代日本において知識人とされる存在はそのほとんどが男性でした。近代日本知識人研究は、圧倒的に男性を対象とし、論じる側もまた男性が中心です。その間、家庭を仕事場としてきた多くの女性たちの姿は、男性に比べるとその足跡を追うことが非常に困難です。しかし、家庭で懸命に働いた女性たちは、日本社会に影響を与えなかったと言えるのでしょうか。このような問題意識のもと女性研究者による国際共同研究として構想しました。本共同研究は、近代日本知識人を生み育てた母に光をあて、近代知識人たちのテキストを通して、彼らの母、ひいては近代日本の母たちの姿を再発見したいと思います。本講演では丸山眞男の母、セイを取り上げます。個人としてのセイ自身を知ることが重要であると見え、丸山が語る母像からセイの姿を浮き彫りにします。

<劉争>

加藤周一と母織子の関係は加藤の自伝小説『羊の歌』の「母」に多く描かれますが、『羊の歌』において「母」のほうが父よりも子供周一に愛される理由は単に「母」であり「女性的」だからでしょうか。母織子に重ねて描かれる『羊の歌』の「母」は子供周一の尊敬に値する人間の像そのものであることに注目します。さらに「母」織子像は単に「母」の像に留まらず、『羊の歌』においては「女性的」なものに表現されていること、そして、そのような「女性的」なものは『羊の歌』の「母」から『続 羊の歌』の「恋人」へと発展していきます。これまでにない視点から新たな解読を試みます。